

『国富論』における「過剰取引 (overtrading)」

— 経済に内在する不安定性の認識 —

立 川 潔

- I 問題の所在
- II 「貨幣不足」の原因としての過剰取引 — 現在の「苦境の性質と原因」—
- III アメリカ植民地における過剰取引
- IV 結びに代えて — スコットランドにおける過剰取引 —

I 問題の所在

これまで、『国富論』は、重商主義的な様々な規制が撤廃され自由な市場の働きが十全に作用すれば、商品の市場価格は中心価格である自然価格に引きつけられて経済の安定性が担保されるとの主張が展開された書物とみなされてきた。あるいは1760年代と70年代の金融危機を経験したスミスは金融市場の特異性を認識するに至り、金融部門の安定性には、少額銀行券の発行禁止をはじめとする法的規制、さらには銀行の自主的な融資規制が不可欠とみなされるに至ったと理解されてきた¹⁾。しかし、いずれに

※引用表記：引用頁数は原典、翻訳のある場合は翻訳の順で、たとえば (Smith [26] 65-66/ I.82) のように数字のみを表記した。なお訳文は適宜変更させていただいた。また傍点はすべて立川による。

- 1) 新村 [34] は、『国富論』の銀行論が、金融システムの安定化をめぐる、①『法学講義』以来の銀行の自由競争擁護論、②1760年代の為替危機と1765年法に結実した法的規制論 — 5ポンド未満銀行券の発行禁止、選択条項の禁止 —、さらに③72年の金融恐慌とエア銀行倒産を踏まえて貸付限度を貸付対象企業の手元現金額に限定すべきとし、その他の流動資本や固定資本は銀行融資によるのではなく私人からの借入によるべきとする銀行の自主的貸付制限論という、三つの層を、金融危機の経験とその認識の深化につれて、積み重ねてきたと整

しろ、『国富論』におけるスミスは、経済の安定性が達成されうるという認識を抱いていたと想定されてきたように思われる²⁾。

本稿では、世界市場を震撼させた1772-73年の金融恐慌を経験した『国富論』のスミスは、経済それ自体が、金融危機を引き起こす不安定性を内在させているという認識に至ったことを明らかにしたい。金融規制を伴った自然的自由の体制の下でも経済の不安定性は拭えないのである³⁾。結論を先取りすれば、『国富論』のスミスは、金融恐慌が、紙券を過剰発行する金融機関だけの問題ではなく、むしろ根源的には、高利潤が見込まれる状況下での過剰な信用による過剰投資に起因するとの認識に至っている。

理されている。なお市場利子率を僅かに上回る水準に法定利子率を定めるべきだという提言が72年の金融恐慌の経験によるものであることについてはRockoff [20] 318-19を参照。

- 2) ノーマンは、スミスにあっては、生産物市場の多くは「均衡に向かう傾向といわゆる見えざる手に支配されていると理解することができる」のに対して、「資産市場は価格づけのメカニズムもちがえば、固有のロジックも異なっていて、急騰と急落を繰り返す傾向をもっている」(Norman [17] 226/311)と考えられているとして、資産市場の特異性を掴んだことをスミスの優位性として高く評価したうえで、この特異性を認めていない効率的市場仮説を批判している。新村も「スミスの経済的自由主義の大きな特徴は、生産物市場を安定的で調和的と考え政府による規制を否定する一方で、金融市場を不安定的と見て政府の規制や銀行の企業モラルの改革が必要と考えた点にあった」と指摘している(新村 [35] 28)。しかし、『国富論』のスミスは、生産も信用に基礎をおいている、それゆえ信用に基づく経済全体が不安定性を内在させていることを認識するに至ったこと、したがって、安定した生産物市場と不安定な金融市場という二分法には立脚していないというのが本稿の主張である。
 - 3) ゲリティによれば、スミスの見解を反映したとされる1765年法の問題は、選別条項を禁止し即時兌換を保証すれば銀行券の減価は終了し、通貨問題は解決しようとの考えであったが、実際は為替危機は1769年まで収まらなかった。それゆえ、直接かつ無条件の兌換という条件では、銀行制度の機能不全に対する十分な保証とはならないという認識をスミスに抱かせた(Gherity [8] 429)。なおグッドスピードは「スミスによって主張された銀行業に対する規制は、金融部門の不安定性を和らげるところか、実際には、それらが救済すると意図した金融部門の不安定性の危機を悪化させた」と主張している(Goodspeed [9] 6-7)。
- いずれにしろ、スミスは、エア銀行が支払停止に追い込まれる数年前まで「一銀行の倒産は通常考えられるほど危険ではないであろう」(Smith [25] 505/312)と言っていたのであるから、1772年の金融恐慌と信用収縮の連鎖という事態は、スミスの商業社会認識に極めて深刻な影響を及ぼしたと言うことができよう。

そして、スミスは経済の不安定性を引き起こす原因を「過剰取引」という概念で表現しているのである。

Ⅱで見ると、スミスによれば、通常以上の利潤獲得が見込まれれば、人々の投資意欲はかき立てられ、過剰投資が助長される。しかも、これは、これまで解釈されてきたように、一部の「夢想的な企画家 (chimerical projectors)」(Smith [26] 316/I.489) が陥る特殊な事象ではなく、平生はそのような投資に慎重な「堅実な人々 (sober men)」をも巻き込む一般的な現象となることをスミスは明確に認識するに至っている。過剰な投資がそれ自体不安定性を内包する信用で資金調達され、ひとたび支払不能が生じれば「貨幣を借りるために至るところ走り回るが、誰もが貸す貨幣はない」という貨幣恐慌を招いてしまうと認識するようになったのである (Smith [26] 437-38/Ⅱ.91-92)。この点は、従来ほとんど指摘されることがなかったが、『法学講義』以降のスミスの商業社会認識の深化を示す重要な論点の一つであると思われる⁴⁾。

このような過剰取引が、「人々の積極的な企業家精神 (the enterprising and projecting spirit of the people)、すなわち手に入るすべての資財を生きた生産的資財 (active and productive stock) にして活用しようとする願望」(Smith [26] 941/Ⅲ.429) という商業社会の動因それ自体によって生じるとすれば、商業社

4) スミスはすでに『法学講義』において、重要な商業では、現金売買ではなく、委託販売がなされていることを指摘している (Smith [25] 528/371-72)。しかし、この段階では委託販売に伴う信用およびそれが孕む不安定性については言及されていない。

ただし、講義前の1762年に発生した金融危機は、7年戦争終結の見込みの下、ロンドン公債購入のためにスコットランドからイングランドの資金流失に伴う為替危機と公債投機に端を発した危機であったため (Hamilton [10] 349)、『法学講義』では公債投機に関しては詳細な検討が加えられている点は留意すべきであろう (Smith [25] 536-38/395-400)。

なお、ホピットは、1770年以降に生じた金融危機は経済成長によって引き起こされたという点で、それ以前の金融危機と性格を異にし、「実際の好況が、不安定な金融機構に対する過剰な依存を助長し、実際の経済変動がしばしば危機の特別な原因を生み出した」(Hoppit [13] 51) と指摘している。

会は根本的な不安定性を抱えていることとなろう。『国富論』のスミスは、このような商業社会に内在する不安定性を認識するに至ったのである。現実の生産・流通は信用を不可欠の前提にしているという事実を踏まえれば、想定されてきたように、生産物部門と金融部門の二分法に、当時のグローバルな市場における金融危機を経験した『国富論』のスミスが、立脚していないことは容易に想像されうるし、それらの部門が相互に密接に関連していることを、そしてそのような信用に基づく経済自体が不安定性を内包していることを透徹した目で洞察していたことも明らかになるであろう。

ところで、これまで、過剰投資こそ金融危機の根本原因だという『国富論』における重要な主張がほとんど認識されてこなかった主要な原因は、過剰取引概念がもっぱら第2編の銀行論の文脈の中でのみ理解されてきたことにあると思われる。そのため、過剰取引が銀行による過剰貸付として⁵⁾、あるいは少数とされる「大胆な企画家」の投機的活動という例外的な事象として理解されてしまってきたのである⁶⁾。しかし、過剰取引概念

5) たとえばマシューズは、短期の貨幣供給量の増大という視点からスミスの「過剰取引」概念を扱っており、その概念は、完全には明確な概念ではないとしつつも、最大許容ギアリングレシオを示しているとし、「(通常、短期借入に基づいた)過大なギアリング、将来収益の過大評価、さらに投機、すなわち価格上昇の期待への依存」(Matthews [16] 336)を含意した概念と解釈している。なお、キンドルバーガーもマシューズの解釈を踏まえて「過剰取引」を「資産ないし商品価格上昇についての投機、期待収益の過大評価、「過大なギアリング」を含意している」(Kindleberger [14] 10/48)。

なるほどスミスは国内商品流通に必要な額以上に銀行が紙券を発行していることも「過剰取引」としているが(Smith [26] 308/I.474)、過剰取引概念は、そのような過剰な紙券発行を促す企業家の資本投資にも用いられていることを本稿では明らかにする。また、マシューズもキンドルバーガーも、超過融資が实体经济にどう影響を及ぼすかという問題意識から論じているが、本稿では、スミスが、通常以上の利潤が期待される状況下での過剰な投資が、過剰な信用、さらには金融危機を引き起こす原因になっていることを認識していたことを示したい。

6) 松尾によれば、スミスは、紙幣の過剰発行の原因を、少数の「黄金の夢」をみる企業家、「途方もない事業」を企画する企業家の「夢想」に求めているのであり、それゆえ「彼らの「過大取引」は、経済の現実過程(資本の過剰蓄積)に誘引されて引き起こされた取引ではない」(松尾 [36] 45)。したがってスミスは、「<「狂熱的な投機心と冒険心」「投機的興奮」>という「心理状態」がな

は第2編だけで論じられているのではない。Ⅲで見るように、植民地をも含む世界市場をその分析対象とする第4編や第5編で用いられている過剰取引概念は、高利潤が見込まれる下では、人々は、過剰信用によって過剰な実物投資を行なう傾向があることを示す概念として明白に用いられているのである。そのことを踏まえて、第2編を読み直してみれば、Ⅳで示すように、第2編においても、金融部門に特有な事象として、あるいは少数の夢想的な企画家による偶発的で例外的な事象として、過剰取引が語られているのではないことを読み取ることができよう。『国富論』に導入された過剰取引概念は、過剰な信用供与とそれによって行なわれる過剰な投資との密接不可分な関係を表現する極めて重要な概念なのである。1772-73年の金融恐慌がヨーロッパ全体とその植民地を巻き込んだ世界市場を震撼させた恐慌であることを踏まえれば、世界市場の実相をより具体的に展開する第4編や第5編で過剰取引がより明確に語られているのも頷けるであろう⁷⁾。

以上の点を踏まえて本稿では『国富論』における経済の不安定性認識について考察していく。

Ⅱ 「貨幣不足」の原因としての過剰取引

— 現在の「苦境の性質と原因」—

1769年に「公共善のために (Pro Bono Publico)」をモットーにスコットランドの「通商、製造業、農業を支えることを意図」したエア銀行が設立さ

にゆえに発生してくるのかということ」をフラートンやマルクスのように「重要な論点として明確に指摘」していない (松尾 [36] 50)。それゆえ、スミスにあっては紙幣の過剰発行の原因が経済の現実過程から把握されていなかったことを強調している。本稿ではスミスは紙幣の過剰発行の原因を経済に内在的な傾向から把握したことを強調したい。

7) 和田 [38] は、『国富論』第4・5編が、第1・2編の基礎理論に照らして重商主義政策や国家財政を批判することだけではなく、国家財政を含めた、そして世界市場を前提とした分業と資本蓄積の総機構を分析することを目的としていることを強調しているが、この点は極めて重要な指摘である。

れた(Checkland [1] 124-25)。1745年以降、とりわけ60年代急速な成長を遂げていたスコットランド経済をいっそう発展させる上でボトルネックとなっているものこそ、通貨と信用の不足であるとの認識のもとに、それを解消すべく寛大な信用供与を提供し、スコットランド経済を一層発展させることをエア銀行は自らの使命としていたのである(Hamilton [10] 344-49; Hamilton [11] 405-17; Sheridan [22] 171)。

『諸国民の富の本質と原因(*the Nature and Causes of the Wealth of Nations*)にかんする研究』は、エア銀行が「救済しようと意図した苦境の本質と原因(*the nature and causes of the distress*)」の解明をも意図していた点が、強調されなければならない。もとよりスミスにとって、この二つの「本質と原因」は密接に関連しているのであるが、ともあれ、スコットランドは、スミスが言うように、「貨幣が不足しているという苦情ほどありふれたものはない」(Smith [26] 437/II.91)状況にあったのである。

しかし、スミスの重商主義批判の論理からすると、商品を流通させるのに必要な貨幣が不足することはない。スミスにとって「貿易の自由は、我々の商品を流通させるかあるいは他の用途のために我々が購買または使用しうるすべての金銀を我々に提供してくれると信じて間違いない」からである。とりわけ嵩の割に価値が大きい金銀は容易に有効需要を満たすことができるはずである(Smith [26] 435/II.88)。それゆえスミスにとって貨幣の不足が苦境の原因ということはありません。実際、『法学講義』では「貨幣が不足するという心配はありません」(Smith [24] 386/410)ことが強調されるだけで、なぜそのような心配が生じるのか、その原因を探求する姿勢は示されていなかった。しかし、金融恐慌とエア銀行の倒産という事態を経験した『国富論』では次のようにその原因が指摘されるに至っている。

「この貨幣不足についての苦情は、必ずしもつねに軽率な浪費家だけに限られるわけではない。それは、ときには、商業都市全体と、その近隣農村

『国富論』における「過剰取引 (overtrading)」

の全般にわたることもある。過剰取引 (Overtrading) こそが貨幣が不足しているという苦情の一般的な原因である。堅実な人々 (sober men) でも、企画 (projects) が自分たちの資本と釣り合わなかつたりすれば、支出が収入と釣り合わなかつた浪費家と同じように、貨幣を買う手段も借りる信用もないということになりがちである。企画が実を結ばないうちに、資本はなくなり、それとともに信用もなくなる。彼らは貨幣を借りるために至るところ走り回るが、誰もが貸す貨幣はないと告げる。貨幣不足についてのこのような一般的不満でさえ、通常量の金銀貨が国内に流通していないということ、必ずしもつねに証明するものではなく、それが証明するのは、金銀貨と引き替えに与えるべきものを何ももっていない多くの人々が、そうした貨幣片をほしがっているということなのである。商売の利潤がたまたま通常よりも大きいときには、大小いずれの業者 (dealers) の間でも、過剰取引が一般的なあやまちとなる。彼らは必ずしもつねに通常以上の貨幣を国外に送るわけではないが、国内外での信用によって通常以上の量の商品を購入し、それらを代金の回収が支払請求前になされると期待してどこか遠方の市場に送る。代金の回収前に支払請求がきて、彼らの手元には、貨幣を購入しうる、あるいは借入のための確実な担保を提供しうるものが何もないのである。貨幣不足についての一般的な不平を引き起こすのは、金銀の不足ではなく、そのような人々が借り入れをしたり、彼らの債権者が支払いを受けたりする際に当面する困難なのである。」 (Smith [26] 437-38/II, 91-92)

スミスは、流通に必要な貨幣が不足することはないという『法学講義』以来の主張を維持した上で、貨幣不足という苦情の原因を過剰取引に求めている。過剰取引が、銀行の過剰紙券発行だけを意味する概念ではないことは引用から明らかであろう。過剰取引は、ここでは「商売の利潤がたまたま通常よりも大きいとき」に、「通常以上の量の商品を購入」とい

う過剰な実物投資という意味で用いられている。しかも留意すべきことは、このような過剰取引に走るのは、一部の「夢想的な企画家」に限られないということである。むしろ、このような高利潤が見込まれる下では、普段はそのような投資に慎重な「堅実な人々」もまた過剰取引に走る。それゆえ、過剰取引は「一般的な過ち」となるのであり、その結果、貨幣恐慌が「商業都市全体と、その近隣農村の全般」を巻き込む広範な規模に達すると認識しているのだ。つまり、期待される高利潤は、多数の業者に、信用による通常以上の販売のための商品購入を促す。そして彼らとその過剰な商品購入に対する支払ができなくなると、貨幣不足が「一般的な不満」として蔓延するというのである。貨幣恐慌の究極的な原因を、スミスはなにか偶然的な事情や金融機関の稚拙な経営に求めているのではなく、高利潤に対する期待が人々を過剰な投資に導くという一般的な傾向に求めているのである⁸⁾。スミスにとって「自分たちの資本と釣り合わなかった」企画を行なうこと、換言すれば「自分たちの資本か、あるいは債務証書か抵当証書 (bond or mortgage) による通常の方法で私人から信用借りをしたもので、運営できる以上に、自らの企画を拡大すること」(Smith [26] 308/I.475) が、生産および流通における過剰取引である。この過剰な投資を可能にしているのが、引用に示されている「国内外での信用」なのである。

スミスはまた、7年戦争によって通常以上の利潤が見込まれた外国貿易が港湾都市における一般的な過剰取引と貨幣不足の不满を引き起こしたと次のように論じている。

「外国貿易の利潤は、戦時全体を通じて、通常より大きかったが、とりわけ戦争の末期にはそうであった。このことは、それがいつも引き起こすこ

8) スミスは「ほとんどすべての人々が自分自身の幸運に対して抱いているばかげた自信のために、ほんの僅かでも成功の見込みがあると、過大な割合の資本が自然にそこに行ってしまうがちなのである」(Smith [26] 562/II.298) と主張しているが、これは過剰な取引にも妥当する記述ということができよう。

とを、すなわち大ブリテンのすべての港で一般的過剰取引 (a general overtrading) を引き起こしたし、さらにこのことは、過剰取引につきものの貨幣不足についての、いつもながらの不平を引き起こした。」(Smith [26] 442/II.100)⁹⁾

このようにスミスは貨幣不足の不満の原因を、高利潤の見込みから生じる過剰取引という一般的な傾向に求めているのである。さて上記二つの引用から、スミスのいう過剰取引とは一時的な価格騰貴を見込んだ商品投機を意味しているだけだと判断される読者もいるかもしれない。しかし、スミスの過剰取引は、そればかりではなく、プランテーションの拡大など長期の生産資本の拡大をも含む概念であることは次の植民地における過剰取引をめぐる言説から明らかになるであろう。

9) なお、スミスは戦時中に好況が続き、戦後不況が生じることを次のように説明している。

「戦時中は、製造業者たちに対しては二重の需要があつて、第一に、軍隊の給与と食料のために外国宛に振出された手形を支払うために外国に送られる財を仕上げるのが求められ、第二に、国内で通常消費されてきた日常の輸入品を購入するのに必要な財を仕上げるのが求められる。したがって、最も破壊的な対外戦争の只中において、製造業者の大部分がしばしば大いに繁盛し、反対に平和が戻ってくると衰退することがある。彼らは自国の破滅の只中で繁盛し、その繁栄が戻ると衰退しはじめることがある。ブリテンの製造業者の多くの部門が、先の戦争中、および平和後しばらくの間、様々な状態を呈したことは、今述べたことの一例証として役立つであろう。」(Smith [26] 444-45/II.103-04)

本稿の観点から特に留意したいのは、「軍隊の給与と食料のために外国宛に振出された手形を支払うために外国に送られる財」をめぐる記述である。この記述の背景には、自国製造品を輸出している商人から「外国宛に振出された手形」を国家が買取り、その手形を軍隊が駐留している外国に送ることで、海外にいる「軍隊の給与と食料」を調達しているというスミスの認識がある (Smith [26] 444/II.103)。スミスは為替手形が国際的な決済手段として用いられていることを知悉していたのである。実際、7年戦争中イングランドはプロシアを支えるために多額の資金を融資しなければならなかったし、加えてハノーヴァーにおける自国軍隊の維持のために支払をしなければならなかった。これらの支払はアムステルダムとハンブルクにおいて支払うべき為替手形によってなされたのである (Wilson [30] 167) を参照。

Ⅲ アメリカ植民地における過剰取引

スミスによれば、新植民地はつねに資本不足の状態であり、「土地の購買や改良に用いられる資本は極めて大きな利潤をもたらす」(Smith [26] 109/I.155)。それゆえ植民地では母国からの借入資本に対する不断の需要がある。ところで留意したいのは、主要な借入方法は、「債務証書 (bond) を入れて母国の富者から借りること」ではないというスミスの認識である。

「新植民地はつねに資本不足 (understocked) である。資本さえ投入すれば、土地を改良し耕作もできて多額の利潤を上げることができるのだが、新植民地には、なかなかそれだけの資本がない。したがって新植民地には、自分たちがもっているよりもより多くの資本に対する不断の需要がある。そして自分たち自身の資本の不足を満たすために、新植民地はできるだけ多く母国から借りようとし、したがって、母国に対してつねに債務を負っている。植民地の住民が借金をする最も普通の方法は、債務証書を入れて母国の富者から借りることではない。ときにはそうすることもあるけれども、自分たちがヨーロッパから財の供給を受けている取引先 (correspondents) に対する支払いを、取引先が許すかぎり延期することによるのである。彼らの年々の返済金は、しばしば3分の1以上に達せず、ときにはそれ以下のこともある。したがって彼らの取引先が彼らに融資した資本の全額が、3年以内にブリテンに回収されることはめったになく、ときには4年ないし5年以内でも回収されないことがあるのだ。」(Smith [26] 601-02/II.363)

おそらくこの記述はスコットランド人が入り込んだタバコ植民地を念頭に書かれたものであろう。タバコ貿易は、主にイングランド商人が委託販売制度によって大プランテーションを中心に展開していたのに対して、スコットランド商人は、現地にファクターを常駐させ店舗でイギリス製品を

掛売りで販売するとともに、タバコを直接プランターから購入するという店舗方式で事業を拡大させてきた¹⁰⁾。スミスは上記の引用でこの信用販売と支払猶予による長期信用化を指摘しているのである¹¹⁾。スミスは「いくつかの州、とりわけヴァージニアとメリーランドでは、財の小売を行なっている店舗や倉庫 (stores and warehouses) ですら、その多くは、母国に住んでいる商人に属していて、社会の小売業がその社会に住んでいない人々の資本によって営まれているという数少ない事例の一つとなっている」(Smith [26] 367/ I.573) と述べているが、この叙述は上記の店舗方式についての記述ということができよう¹²⁾。

さらにスミスは大ブリテンとタバコ植民地との貿易について次のように述べている。

「大ブリテンとタバコ植民地との貿易では、ブリテンの財貨は一般にかなり長期の信用で植民地の住民に前渡しされ、のちになって、一定の価格で評価されたタバコで支払われる。植民地の住民にとって金銀で支払うよりもタバコで支払うほうが都合がよい。商人にしても、取引先 (correspondents)

10) タバコ貿易の主たる二形態、すなわち委託販売方式と店舗方式については、(Devine [3] 60; Devine [4] chap. 4; Sheridan [22] 168-69; Kosmetatos [15] 65-66; Emory [5] 518 を参照。

11) 実際回収がいかに遅かったかについては、Price [19] 25-26 を参照。

12) プライスは、グラスゴウがヴァージニアとメリーランドの発展に果たした役割の第一は信用だとして次のように述べている。「グラスゴウは、ピードモント・フロンティアに融資してきたと行うことができよう。そのような信用はめったに正式でも長期でもなかった。抵当証書ないし債務証書は、特別に疑わしい債務を請け負う場合を除いて、ほとんど作成されなかった。提供された金融上の援助は通常、店舗の帳簿上の信用貸の形態でなされた。しかし、それによってプランターはフリー・ハンドをえた。実際それによってプランターは、さもなければ今必要なことに割り当てなければならなかった現金と労働を、長期プロジェクトに転用することができた。つまり、プランターは土地に投機し、奴隷を買い、耕作のために土地を開墾する等のことができたのである」Price [18] 197; Soltow [27] 97; Devine [3] 61 も参照)。スミスはこのような信用供与を認識していたわけである。

が自分に売った財に対して貨幣で支払うよりも、自分が扱っている他の財で支払うほうが都合がよいであろう。そのような商人は、時々の請求に応じるために、自らの資財の一部を手元現金として遊ばせておく必要はない。彼はいつでも自らの店舗や倉庫でより多くの商品を在庫しうるし、さらに、もっと手広い商いをすることもできよう。そうはいっても、ある商人の取引先のだれもが、この商人に売った財の支払を、この商人が扱っている他の種類の財で受け取るほうが都合が良いというようなことは、めったにない。ところが、ヴァージニアやメリーランドと取引するブリテンの商人は、植民地の商人にとって特殊な取引相手であって、彼らが植民地に売る財に対して金銀よりもタバコで支払いをうけるほうが好都合なのである。つまり彼らはタバコの販売で利潤をあげようと期待しているのである。彼らは金銀の販売では利潤をあげることはできないであろう。したがって、金銀は大ブリテンとタバコ植民地との貿易ではほとんどみられないのである。」(Smith [26] 941-42/Ⅲ.429-30)

このようにタバコ植民地との貿易においては、「ブリテンの財貨は一般にかなり長期の信用で植民地住民に前渡しされ、のちになって、一定の価格で評価されたタバコで支払われる」。植民地に常駐する商人であるファクターは、プランターから購入したタバコで、母国のタバコ商人から仕入れた「ブリテンの財貨」の代金を支払えばよいのだから、「自らの資財の一部を手元現金として遊ばせておく必要はない」。それゆえ「いつでも自らの店舗や倉庫により多くの商品を在庫しうるし、さらに、もっと手広い商いをすることもできる」。したがって金銀がこの貿易に用いられることは殆どない¹³⁾。つまり、プランターの生産物であるタバコが支払い手段と

13) 池本によれば、プランターとの決済は現金でなくて、タバコを売却する条件で、消費物資をクレジットで買うことが許された。しかもタバコの代金が前渡品の代金を満たすことが稀であったため、クレジットの繰り越しが常態となり、それが恒常化した（池本 [31] 313）。引用から明らかなように、スミスはこのよ

なるために、それだけ母国からの長期信用供与によって、プランターはブリテンの財貨をより多量に購入できる関係にあったことをスミスは指摘しているのである¹⁴⁾。

したがって、スミスによれば、このような植民地からの資金回収の困難さは、植民地の貧困によるものではないし、母国に対する支払差額の大きい北部植民地のほうがタバコ植民地よりも規則的に支払われていることから分かるように、母国と植民地の支払差額の大きさによるのでもない (Smith [26] 942/Ⅲ.431)。スミスが強調しているのは、高利潤が期待できる投資機会の大きさ、すなわち過剰取引への誘惑の大きさである。スミスは西インド諸島の砂糖プランテーションについて次のように述べている。

「我々の様々な砂糖植民地から支払いをうける困難さの大小は、それらの植民地のそれぞれが支払うべき差額の程度に比例するというよりは、それぞれの植民地がかかえている未耕地の広さに、換言すると、プランターたちがおかれている過剰取引 (over-trading) への誘惑の大きさ、言い換えると自らの資本の大きさにふさわしくないほどの広大な荒蕪地に定住地とプランテーションを作りたいという誘惑の大きさに、比例している。このために、いまなお広大な未耕地のある大きなジャマイカの島からの返済は、バーベイドウズ、アンティーガ、セント・クリストファーズという、より小さな島よりも、一般に不規則で不確実である。というのは、これらの島々

うな状況を描写しているのである。

- 14) ソルトウによれば、植民地店舗の信用は「ロンドンに究極の源泉がある」。なるほど「スコットランド自体は資本不足に苦しんでいたが、グラスゴウの「タバコ貴族」は、ロンドンの代理人 (London agents) 宛の為替手形の振出・逆振出で自らの事業の資金調達をすることができたのである」 (Soltow [27] 95; Devine [4] 90-91 も参照)。このように現実のタバコ貿易は、現地の信用取引だけではなく、スミスが『国富論』で厳しく批判していた為替手形の振出・逆振出にも依存していたのである。タバコ貴族と親交のあったスミスが振出・逆振出を論じたときに、彼らの取引も念頭にあったことは容易に想像しうるであろう。なお植民地のブリテンの財貨輸入の背景には航海条例があることは言うまでもない。

は、これまで多年にわたって完全に耕作され、そのためプランターの投機のための余地が、より少ないからである。グレナダ、トバゴ、セント・ヴィンセント、ドミニカが新たに獲得されたために、この種の投機のための新しい余地 (a new field for speculations of this kind) が開かれ、これらの島々からの返済は近年、大きなジャマイカ島からの返済と同様に、不規則で不確実になっているのである。」(Smith [26] 942-43/Ⅲ.431-32)

まず指摘しておきたいことは、ここでいう「過剰取引」、あるいは「プランターの投機」とは、将来の値上がりを見込んだいわゆる土地投機だけではなく¹⁵⁾、明らかに植民地における土地改良のための生産資本投資をも意味していることである。スミスにおいて、投機とは、売買差益を獲得する目的での投機だけではなく、「何か新しい製造業、新しい商業部門、あるいは農耕方法を確立させることは、つねに投機 (speculation) であって、画家はそのから特別利潤を期待する」(Smith [26] 131/Ⅰ.191) と論じているように、新たなプランテーション経営も投機とされていることを忘れてはならない。経済活動は不確実な世界の中で行なわれているのであり、実物投資も投機という側面を必然的にもっていることをスミスは認識している(立川 [33])。ともあれ、すでに土壌消耗の激しい島々ではなく、広大な未耕地があるジャマイカと7年戦争によって獲得した割譲諸島においては高利潤が期待されるために「自らの資本の大きさにふさわしくないほど」過剰な生産資本投資がなされるので、母国への返済が滞っているのだとスミスは主張しているのである。スミスによれば、植民地自体の漸次的改良と耕作から生産資本を蓄積してきたフランスの砂糖植民地とは違って「イングランドの砂糖植民地を改良し耕作してきた資財は、その大部分は、イングランドから送られてきた」(Smith [26] 588/Ⅱ.340) ので、それが返済を遅延

15) 砂糖植民地における土地投機については、Price [19] 16-17を参照。

させるほどの過剰な信用で購入され、それゆえ「母国に対してつねに債務を負っている」状態にあったのだ¹⁶⁾。

もちろんこうした植民地への投資は現地のプランターによってなされるだけではない。むしろプランターと母国商人とは密接な人的および信用ネットワークで結びついていたのであり、母国商人自身もプランテーション経営に投資していたことをスミスは見落としていない¹⁷⁾。

「我々はしばしば、ロンドンやその他の商業都市の貿易商人の団体 (societies of merchants) が、わが国の砂糖植民地の荒蕪地を購入するのを目撃している。彼らはこれらの土地が遠方にあり、欠陥のある司法制度であるにも関わらず、ファクターや代理人 (agents) を使って土地を改良し耕作し利潤をあげることを期待しているのだ。」 (Smith [26] 174/ I.262-63)

16) 植民地にこのような長期信用で母国の資財を提供しえたのには、当然母国の製造品の購買が長期信用で行なわれたからである。ただし多くの製造業者はそのような長期信用で取引しうる資金をもっていなかったので、ファクターや卸売商のような中間商人による信用供与に依存していた。たとえば、織元の毛織物を委託販売したロンドンのファクターが、その手元にある織元の勘定に売上代金を入金し、信用で織元に提供した羊毛の代金をこの勘定で清算する。さらにこの勘定を基礎に、織元がロンドンに織物を出荷するとすぐにファクターは自分宛の為替手形を織元に振出すことを許すことで信用を供与したのである (Westerfield [29] 279-81, 296-302; Price [19] 103; Rogers [21] 104-06/107-09 参照)。このように植民地に輸出する財貨を生産する際にも為替手形による引受信用が重要な役割を果たしていた (Price [19] 140-41)。

スミスが羊毛輸出禁止条例を「ドラコの法律のごとく、ことごとく血で書かれている」と厳しく批判したことは周知のところであるが、その「すこぶる苛酷な」刑罰の一つとして、スミスは、有罪の判決を受けた商人その他の者は「何人といえども、ファクターないしその他の人に債務を要請したり自分の勘定を要請したりすることができない」という条項を取り上げ、この条項の目的は、有罪を受けた商人その他の者を「完全に没落させる」ことだったと主張している (Smith [26] 649/II.445)。このことは、ファクターの手元に形成される勘定を用いた信用供与ぬきには織物取引が成り立たないことをスミスが知悉していたことを示唆している。

17) 割譲諸島への母国からの直接投資については Sheridan [22] 165, 258-59 を参照。また母国の西インド貿易商と西インドプランターとの密接な関係については川分 [32] 第4部を参照。ロンドン商人たちの砂糖植民地における土地購入とプランテーション経営については Hancock [12] 144-45 を参照。

こうした人々が母国議会における西インド利害関係者として大きな影響力を振るったことはいうまでもないし、スミスが独占批判の対象としていたことも周知のところである (Smith [26] 661/II.466-67)。しかし、同時に確認しなければならないことは、高利潤の見込みがあれば、独占の有無にかかわらず、過剰取引が促されるという傾向に関するスミスの認識である。そのことは、植民地での金銀貨の払底と過剰な紙券発行もまた植民地の貧困に起因するのではなく、生産資本に対する過度の欲求にあるとする次の引用の中にも読み取ることができる。

「植民地の大部分で、金貨や銀貨の払底が現在生じているのは、植民地の貧困によるのではない。植民地が生きた生産的資財を大いに要求しているがゆえに、できるだけ死んだ資財を持たないことが都合が良いのであり、そのために彼らは、金銀よりも、不便ではあるにせよ、より安い商業用具で甘んずる気にもなるのである。それによって植民地は、その金銀の価値を、商売の道具に、衣類の原料に、家庭の家具に、そして彼らの定住地やプランテーションを建設し拡大するために必要な鉄製品に転用することができる。金銀貨なしでは取引できない事業部門では、いつでもそれらの金属の必要量が手に入るようだし、もし手に入らないことがしばしばあるとしても、そのような不足は一般に彼らの避けがたい貧しさの結果ではなく、彼らの余計な過度の企業熱 (unnecessary and excessive enterprise) の結果なのである。植民地からの支払いが不規則で不確実なのは、彼らが貧しいからではなく、彼らが過度に富裕 (excessively rich) になろうという渴望を強くもちすぎるためなのである。」 (Smith [26] 943/III.432-33)

「死んだ資財」である金銀貨が払底している原因は、「商売道具や服地や各種の家具や、自分たちの定住地やプランテーションの建設と拡大に必要な鉄製品を購入するのに、つまり死んだ資財ではなく、生きた生産的資財

を購入するのに用いるほうが都合がよい」(Smith [26] 940/Ⅲ.428) からであった。高利潤の期待の下で膨れあがる「過度の企業熱」が、スミスのいう「過剰取引」、すなわち過剰な「生きた生産的資財」投資を遂行すべく、過剰な信用供与と金銀貨の払底を現出させるのである。

しかし、余計な企業熱といっても、あるいは過度に富裕といっても、これらを抑制する原理はスミスの商業社会には存在しない¹⁸⁾。むしろ「商売人 (tradesman) でさえ、仲間内で旨みのある仕事、めったにない利益とよばれているものにありつこうと努めなかったならば、隣人たちから気概のない奴と思われる」のであり、「この活気と熱意 (spirit and keenness) こそが、企業心のある人物 (the man of enterprise) と日常性に埋没している人 (the man of dull regularity) との違い」であれば、「世間から賞賛される」のは企業心のある人物であることはいまでもなかろう (Smith [23] 173/(上)366)。そうであれば、スミスのいう過剰取引自体、偶然的な事情によって引き起こされるだけではなく、より本質的に商業社会に内在する傾向性から発出するということになる。『国富論』におけるスミスが掴んだのは商業社会自体を不安定化させる内在的な性向であったのだ。もちろん高利潤は独占によって人為的にも作り出される。スミスの主たる批判がそこにあったことはいうまでもないであろう。しかし、たとえ独占が解体され自然的自由の体制が確立されたとしても、高利潤の植民地、あるいは戦争による好景

18) 『道徳感情論』第6版でスミスは、「世間での大成功、人類の感情と意見に対する大きな支配 (authority) は、ある程度の過大な自己賞賛 (this excessive self-admiration) なしに獲得できた例はまずない」と主張する。「この自惚れは、おそらく、堅実な人がけっして考えつかないであろう事業へと、彼らを促すのに必要であっただけではなく、そのような事業において彼らを支持する、彼らの追従者の服従と従順を獲得するのに必要であった」とし、さらに「成功している間は、公平な観察者ですら、しばしば、彼らによって完全に征服され圧倒されてしまう」と主張する。こうして、公平な観察者を介した自己規制は十分になされず、「当初の優れた能力と成功に導く企業熱 (successful enterprise) が、最後には必然的に破産と破滅に至る事業へとしばしば誘う」(Smith [23] 252/(下) 187) ことをスミスは指摘しているが、この記述は過剰取引を念頭においても読むことができよう。

気という特殊な事態だけではなく、資本蓄積の必然的な帰結である「何か新しい製造業、新しい商業部門、あるいは農耕方法を確立させること」によって「特別利潤を期待しうる」事態が生じれば、過剰な信用による事業の過度の拡大という過剰取引が生じることになるであろう¹⁹⁾。

IV 結びに代えて — スコットランドにおける過剰取引 —

アメリカ植民地における母国からの過剰な信用供与、さらに金銀貨の払底と過剰な紙券発行はいずれも、「容易に入手できる以上の多くの資本を自らの土地の改良に用いていつでも利潤をあげることができる」(Smith [26] 940/Ⅲ.428) からであった。金銀貨の紙券への代置は、「生きた生産的資財を購入する」ためであった。高利潤の見込みによる過度の企業熱、つまり過剰な投資意欲こそ植民地における過剰な紙券発行の原因であった。そしてそれはスコットランドの過剰な紙券発行の究極的な原因でもあったのだ。

「紙幣が過剰 (redundancy) になれば、植民地の国内取引から必ず金銀は駆逐されるのであって、それは紙幣の過剰がスコットランドの大半の国内取引から金銀を駆逐したのと同じ理由のためである。そしてどちらの国におい

19) スミスは、もし合邦によって植民地が租税として金銀貨を母国に送金することになれば、植民地は紙券の一部を金銀貨に換えなければならない。そうすれば、「この高価な用具を購入する費用は、土地改良における活発で熱気を帯びた過度の企業熱にいくらか水をさすであろう」と述べて、金銀貨での税の支払が過度の土地改良投資をいくらか緩和する効果があると主張している。しかし、植民地はこの租税を金銀で送る必要はなく、「アメリカの余剰生産物の一部を委託された大ブリテンの商人や会社宛に振出され、引き受けられる手形で送金」すれば、これらの商人や会社が国家からその手形を呈示されたとき、委託された商品の販売代金で国庫に納入することができるので植民地からは金銀が流出することはないとも述べている (Smith [26] 943-44/Ⅲ.433)。この場合は、もちろん「過度の企業熱に水をさす」効果はないのである。この指摘は、委託販売制度と為替手形の引受信用が過度の企業熱を下支えしているとのスミスの認識を示唆しているといえよう。

『国富論』における「過剰取引 (overtrading)」

でも、このような紙幣の過剰を引き起こしたのは、人々の貧困ではなくて、人々の積極的な企業家精神、すなわち手に入るすべての資財を生きた生産的な資財として使用しようとする願望なのである。」(Smith [26] 941/Ⅲ.428-29)

引用から明らかなように、スミスにとって、スコットランドでの紙券の過剰発行と貨幣不足の原因は植民地と同様に「人々の積極的な企業家精神、すなわち手に入るすべての資財を生きた生産的な資財として使用しようとする願望」に起因する過剰取引であったのだ。

スコットランドは、1745年以降、とりわけ60年代以降急速な経済成長を遂げていた。「経済全体は時代の楽観主義に囚われていた。農業、外国貿易、資本投資の大きな企画において、将来への確信の根拠があった。継続する利潤に対する期待は金融への需要を強め、エア銀行は進んでそれに応えようとした」(Hamilton [11] 411-15)。スミスは、エア銀行の公然たる方針は「土地改良のように、収益があがるのが最も緩慢で時間のかかる改良に用いられるべき全資本を、しかるべき担保さえあれば融資する」(Smith [26] 313/I.484) ことにあったと指摘し、生産資本のための融資拡大を懸念していた。拡張する経済に対応する貨幣と信用の拡大が叫ばれていたのである。しかし、スミスにとっては、スコットランドは、貨幣と信用の更なる拡大が求められる状態ではなく、むしろ反対にあまりに楽観的な見通しの下で投資が過剰になされている状態であった。

「紙幣のこのような過剰流通の根本原因は、連合王国の両地方にいる大胆な企画家の過剰取引 (the overtrading of some bold projectors) であった。」(Smith [26] 304/I.467)

急速な経済成長の中で、「夢想的な企画家」もいたであろう。「黄金の夢

の中で大きな利潤をはっきり見ていた」企画家もいたであろう。好況の中で投機筋の動きが活発化することも確かであろうし、実際にそうだったわけである。しかし、そうした動きだけではなく、そうした動きと結びついた過剰な信用による過剰な実物投資がなされる一般的傾向を『国富論』のスミスは認識するに至っている。「大胆な企画家」はけっして「幾人かの」という少数の人々ではなかったのである。

スミスは第2編の銀行論において、銀行が業者に貸出しできる範囲は、業者が折々の要求に応えるために遊休させている手元現金だけに限定すべきであると強く提言している (Smith [26] 304/I.467)。スミスが、銀行は、流動資本とともに「固定資本のかなりの部分、たとえば製鉄工場の企業家が塊鉄炉と熔鋳場、作業場と倉庫、労働者の住居などを建設するのに使用する資本、鋳山の企業家が立坑を掘り、排水機関を設置し、道路と鋳車道などをつくるのに使用する資本、土地改良を企てる人が荒蕪未耕の原野を開墾し、排水し、囲い込み、施肥をし、犁で耕作するのに使用し、さらに農舎やそれに必要な畜舎、穀倉などの全ての付属物を建設するのに使用する資本の、かなりの部分を融資する余地はさらにありえない」 (Smith [26] 307/I.472-73) と極めて具体的に事例を挙げて融資の限界を強調しているのは、まさに銀行融資によってそのような固定資本への投資が現実に行なわれていたからであろう (Checkland [1] 227-33)。さらに、「融通為替手形 (circulating bills of exchange) に基づいて発行された紙幣は、多くの場合、農業、商業、製造業の巨大で広範な企画 (vast and extensive project) を遂行するために予定された資金全体にまで及んだ」というのがスミスの現状認識であった点も、スミスが過剰信用による過剰投資の一般的傾向を危惧していたことを示しているであろう (Smith [26] 311/I.480)。

なるほどスミスにとってスコットランド、とりわけその農業は発展の余地が大いにある。しかし、「企画家たちは、ヨーロッパの至る所で、ここ数年、土地の耕作と改良とによってあげられる利潤について、途方もない

話をして、公衆を欺いた」というのがスミスにとってスコットランドの経済の実相でもあった (Smith [26] 374/ I.585)²⁰⁾。このような高利潤の見込みが—その見込みはスミスがいうように「途方もない」ほど膨れあがるのだが—、一部の「夢想的な企画家」だけではなく、Ⅱで確認したように、「堅実な人々」をも過剰取引に巻き込んでしまうことをスミスは深刻に受け止めることになったと言えよう。

このように『国富論』のスミスは、金融危機が、資本蓄積に内在する傾向から、すなわち高利潤の見込みがあれば、「人々の積極的な企業家精神、すなわち手に入るすべての資財を生きた生産的な資財として使用しようとする願望」から生み出されること、すなわち過剰取引によって生み出されることを認識するに至ったのである。明らかにしてきたように、スミスは、過剰な投資を可能にしているのが、「国内外での信用」であることを熟知していた。その信用の中核にあったものこそ、当時の国内外の支配的な取引形態である委託販売制度と、それと不可分な、アムステルダムを国際的な多角的決済地とする為替手形の引受信用であった²¹⁾。信用不安が世界的規模に拡大せざるをえなかったのはそのためである²²⁾。しかし、この点に

20) ファーガスンは、18世紀に「農業が、イングランドと同様にヨーロッパにおいて、情熱の対象 (passion) となった」と言えるならば、スコットランドでは、ほとんど熱狂の対象 (mania) となったと言えよう」(Ferguson [6] 169/171) と述べている。

21) 当時の国内外の支配的な取引形態が為替手形の引受信用を基礎とした委託販売制度にあったことは Rogers [21] および楊枝 [37] を参照。この制度についてのスミスの認識に関しては別稿で論じる予定であるが、委託販売制度の下での信用は生産者から商人ではなく、商人から製造業者に供与されたことは留意すべきであり、スミスもこの信用供与を前提としていたことは次の引用から明らかであろう。「卸売業者 (wholesale dealer) は、製造業者に対してすぐに売れる市場を提供し、製造業者が製品を作り上げるや否や、彼の手許からそれを引き取り、時には、製品が出来上がる前に代金を前払いさえすることによって、製造業者が自らの全資本を、また時として、それ以上の資本を、たえず製造に投下しておくことを可能にする。そしてその結果、もし製造業者が自分自身で自らの財を直接の消費者に、あるいは小売業者に売らなければならない場合とくらべてさえ、はるかに大量の財を製造できるようにする。」(Smith [26] 531/II.245)

22) スミスは、イングランドが対オランダ貿易では歴大な黒字であるにもかかわらず

ついで『国富論』における認識は別途論じなければならない。

【参考文献】

- [1] Checkland, S. G., *Scottish Banking: A History, 1695-1973*, Glasgow: Collins, 1975.
- [2] De Vries, Jan and Van der Woude, Ad, *The First Modern Economy: Success, Failure, and Perseverance of the Dutch Economy, 1500-1815*, Cambridge, 1997: 大西吉之・杉村未樹訳『最初の近代経済：オランダ経済の成功・失敗と持続力 1500-1815』名古屋大学出版会, 2009年。
- [3] Devine, T. M., ‘Glasgow Merchants and the Collapse of the Tobacco Trade 1775-1783’, *The Scottish Historical Review*, Vol. 52, No. 153, Part 1, 50-74, 1973.
- [4] Devine, T. M., *The Tobacco Lords: A Study of the Tobacco Merchants of Glasgow and their Trading Activities, c. 1740-90*, Edinburgh University Press, 1990.
- [5] Emory G. Evans, ‘Planter Indebtedness and the Coming of the Revolution in Virginia’, *The William and Mary Quarterly*, Vol. 19(4), 511-533, 1962.
- [6] Ferguson, W., *Scotland: 1689 to the Present*, Edinburgh, 1965: 飯島啓史訳『近代スコットランドの成立：一八—二十世紀スコットランド政治経済史』未来社, 1987年。
- [7] Gherity, J. A., ‘An Early Publication by Adam Smith’, *History of Political Economy*, vol. 25(2), 241-282, 1993.
- [8] Gherity, J. A., ‘The Evolution of Adam Smith’s Theory of Banking’, *History of Political Economy*, vol. 26, (3), 423-441, 1994.
- [9] Goodspeed, Tyler Beck, *Legislating Instability: Adam Smith, Free Banking, and the Financial Crisis of 1772*, Cambridge, 2016.
- [10] Hamilton, Henry, ‘Scotland’s Balance of Payments Problem in 1762’, *The Economic History Review, New Series*, Vol. 5(3), 344-357, 1953.

らず、ハンブルク、ダンツッヒ、リガなどからの輸入財貨に対してオランダ宛
為替手形で決済をしなければならないため、イングランドからオランダに大量
の貨幣が現送されていることを指摘している。このようにスミスは貿易収支の
決済は双務的なものではなく、オランダを中心とした多角的決済システムで行
なわれていること、さらにオランダ宛為替手形が主要な国際的な決済手段とし
て用いられているがゆえにオランダのアムステルダムが国際信用ネットワーク
の決済地となっていることを認識していた (Smith [26] 477/II.156)。

- [11] Hamilton, Henry, ‘The Failure of the Ayr Bank, 1772,’ *The Economic History Review, New Series*, Vol. 8(3), 405-417, 1956.
- [12] Hancock, David, *Citizens of the World: London Merchants and the Integration of the British Atlantic Community, 1735-1785*, Cambridge: Cambridge University Press, 1995.
- [13] Hoppit, J., ‘Financial Crises in Eighteenth-Century England’, *Economic History Review*, vol. 39(1), 39-58, 1986.,
- [14] Kindleberger, Charles P., *Manias, Panics, and Crashes: a History of Financial Crises*, Palgrave Macmillan; 6th ed. 2011: 高遠裕子訳『熱狂, 恐慌, 崩壊: 金融危機の歴史』日本経済新聞出版社, 2014年。
- [15] Kosmetatos, Paul, *The 1772-73 British Credit Crisis*, Palgrave Macmillan, 2018.
- [16] Matthews, ‘Public Policy and Monetary Expenditure’, in *The Market and the State. Essays in Honour of Adam Smith*, edited by Thomas Wilson, Andrew S. Skinner, 330-45, 1976.
- [17] Norman, Jesse, *Adam Smith: What He Thought, and Why it Matters*, Penguin, 2019: 村井章子訳『アダム・スミス 共感の経済学』早川書房, 2022年。
- [18] Price, Jacob M., ‘The Rise of Glasgow in the Chesapeake tobacco Trade, 1707-1775’, *The William and Mary Quarterly*, vol. 11 (2), Scotland and America, 179-199, 1954.
- [19] Price, Jacob M., *Capital and Credit in British Overseas Trade: The View from the Chesapeake, 1700-1776*, Harvard University Press, 1980.
- [20] Rockoff, Hugh, ‘Adam Smith on Money, Banking, and the Price Level’, in *The Oxford Handbook of Adam Smith*, edited by Berry, C. J. Paganelli, M. P. and Smith C., Oxford, 2013.
- [21] Rogers, J. S, *The Early History of the Law of Bills and Notes: A Study of the Origins of Anglo-American Commercial Law*, Cambridge, 2004: 川分圭子訳『イギリスにおける商事法の発展—手形が紙幣となるまで』弘文堂, 2011年。
- [22] Sheridan, R. B., ‘The British Credit Crisis of 1772 and The American Colonies’, *The Journal of Economic History*, 20(2), 161-186, 1960.
- [23] Smith, Adam, *The Theory of Moral Sentiments*, in *The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith*, Oxford, 1976: 水田洋訳『道徳感情論』(上)(下), 岩波文庫, 2003年。

- [24] Smith, Adam, *Lectures on Jurisprudence*, (LJA) in *The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith*, Oxford, 1976: 水田洋・篠原久・只腰親和・前田俊文訳『アダム・スミス 法学講義 1762~1763』名古屋大学出版会, 2012年。
- [25] Smith, Adam, *Lectures on Jurisprudence*, (LJB) in *The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith*, Oxford, 1976: 水田洋訳『『法学講義』』岩波文庫, 2005年。
- [26] Smith, Adam, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, in *The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith*, Oxford, 1976: 大河内一男監訳『国富論』I-III, 中公文庫, 1978年。
- [27] Soltow, J. H., 'Scottish Traders in Virginia, 1750-1775', *Economic History Review*, vol. 12(1), 83-98, 1959.
- [28] Stewart, Dugald, 'Account of the Life and Writings of Adam Smith LL.D.', in *The Collected Works of Dugald Stewart*, vol. X, edited by Sir William Hamilton, Edinburgh, 1858: 福鎌忠恕訳『アダム・スミスの生涯と著作』御茶の水書房, 1984年。
- [29] Westerfield, Ray, B., *Middlemen in English Business: Particularly Between 1660 and 1760*, New York, 1968.
- [30] Wilson, C. H., *Anglo-Dutch Commerce and Finance in the Eighteenth Century*, Cambridge, 1966.
- [31] 池本幸三『近代奴隷制社会の史的展開：チェサピーク湾ヴァージニア植民地を中心として』ミネルヴァ書房, 1999年。
- [32] 川分圭子『ボディントン家とイギリス近代—ロンドン貿易商1580-1941』京都大学学術出版会, 2017年。
- [33] 立川潔『『国富論』における不確実性と投機』『成城大学社会イノベーション研究』17巻第1号, 73-86, 2022年。
- [34] 新村聡『金融システム安定化の古典理論—アダム・スミス銀行論の成立過程』『岡山大学産業経営研究会研究報告書』37巻, 2002年。
- [35] 新村聡『アダム・スミスにおけるケインズの問題—総需要不足と金融不安定性をめぐる—』『岡山大学経済学会雑誌』第35巻第2号, 27-35, 2003年。
- [36] 松尾純『アダム・スミス著『国富論』における「紙幣過剰」分析について』『桃山学院大学経済経営論集』59巻第4号, 23-58, 2018年。
- [37] 楊枝嗣朗『近代初期イギリス金融革命—為替手形・多角的決済システム・商人資本—』ミネルヴァ書房, 2004年。

『国富論』における「過剰取引 (overtrading)」

[38] 和田重司『アダム・スミスの政治経済学』ミネルヴァ書房, 1978年。

(付記) 本稿は2022年度成城大学特別研究助成(研究課題 アダム・スミス市場論の再検討)による研究成果の一部である。